



## 石川大我さん

1974年 豊島区生まれ。若者支援NPO法人での活動や下北沢でのオリジナル衣料ショップ経営などを経て、参議院議員福島みずほ秘書。元・千葉県人権施策推進委員会委員。2011年より豊島区議会議員。同性愛を公言し、当選した日本初の公職者となった。

というもんじゃない、と考えるようになりました。人間としての生き方を全部教えてくれる方だったので、そういう方と出会えて、私は更生できたと思います。だから私は、まず自分のおかれている性別と、まわりから見られている性別をちゃんと理解して、「自分は女になりたいから、女として扱ってください」というのではなく、下手に反発ばかりせずに社会的に振る舞いなさいと言いたいですね。そういうことが私は大切だなと思います。

### エンジョイしている姿を見せたい

私は無理して社会を変えようとは思いません。私は、社会を変えることにパワーを使いたいと思うほうではないので。私たちがみたいなセクシュアルマイノリティが動くことが大切ということもあるけど、私は頑張るほうでなくて、私がエンジョイして、「セクシュアルマ

イノリティでもよい人生を送れたよ」と、そういう生きざまみたいなのが、勝手に伝わる程度でいいですね。そして、男性の役割、女性の役割というように、性別で役割を決めるのではなく、お互いがお互いのことを尊重しあって生活していければいいと思います。

### 冬の寒さが厳しいほど、綺麗な花が咲くもの

同じ悩みを持っている人から相談を受けることは結構あります。今の時代の子たちは温室育ちで、性別同一性障害と言われ、セーラー服で学校にいても認められちゃう世の中ですよ。そういう温室で育った子って弱いから、私は逆にそれは可哀そうだなと思うのです。社会ってそんなに優しくないから、傷ついても頑張れる10代のうちに、処世術を身につけつつ、いろいろ経験したほうがいいと思います。

### 同性愛であることに気づいて

自分がまわりの人と違うのかな、と気づいたのは、小学校5年生のときです。同級生の友だちが異性に関心を持ち始めるなかで、僕は同性の先輩と一緒にいるときに、楽しいとかワクワクするとか、そんな気持ちになりました。ただそのときは、自分が同性愛であるとかわからずに、あの人というとかハッピーになるな、と思ったくらいでした。中学生になると、女性アイドルや恋愛話が話題にのぼるようになり、僕は異性愛

セクシュアルマイノリティとして生きていくのなら、自分なりの処世術を学んでいかなないと自殺しかねない。年をとって傷つくのは自分だし。だから、私は下手に他人に優しくしたくないのです。悩んでいる若い人には、「悩んでポロクソに泣け、泣きわめけ！」と言いたいですね。

桜と一緒にですよ。冬の寒さが厳しいほど、綺麗な花を咲かすと言うでしょう。日本人ってそういうの大好きでしょう。嫌でしょう、年中桜が咲いてたら。

私たちはセクシュアルマイノリティだからこそその絆の強さもあるし、ゲイというだけで仲良くなれたりもする。マイノリティの良さはそういうところにある訳だし、私たちにしか咲かせられないものもあるわけだから、そのほうを私は選びたいなと思っています。そういうことを若い子には伝えるようにしています。



のふりをして、みんなに話を合わせていました。これは同性愛の人がみんな声をそらえて言うことですが、同性を好きだということに気づいたとき、「まわりに知られてはいけない」、「親に隠さなくてはいけない」と思ってしまうんです。やはり一般的に、同性同士が恋愛することに対して、ネガティブなイメージがあり、それが子どもたちにも無意識のうちには伝わり、「これは誰にも言ってはいけないことだ」と考えるんじゃないかと思っています。